

自動車技術は「サービスを生み出す土台」に、 これから、MaaSが熱くなる

楽読(ラクヨミ)

nikko am
fund academy

自動車産業は今、100年に一度の大きな転換期にあると言われています。キーワードは「CASE」です。「CASE」とは、Connected(ネットとの接続)、Autonomous(自動運転)、Shared(シェア)、Electric(電動化)の頭文字を組み合わせたものです。現在、自動車産業では、この4つの技術革新が同時に到来しており、AI(人工知能)の進化とも相まって、自動車産業のみならず、他産業のビジネスに及ぶ形で変革が起ころうとしています。もともと、この「CASE」という言葉は、ガソリン自動車を発明した、ドイツのダイムラー社(代表的なブランドは「メルセデス・ベンツ」)が、次世代に向けて提唱したキーワードでした。しかしながら、今や自動車産業全体がこれを共有し、パラダイムシフトに取り残されないよう、研究開発や投資を進める状況となっています。

そして、このパラダイムシフトの中で注目されているのが、MaaS(マース: Mobility-as-a-Service: サービスとしてのモビリティ)です。これまで車は「移動や輸送に使うもの」でした。しかしながら、今後は、自動運転の普及とともに、サービスを生み出すプラットフォーム(土台)になっていくと考えられています。自動車産業の中で、長年にわたり技術革新の先導役となってきたトヨタ自動車は、今年、米国・ラスベガスで開催された世界最大級の見本市「CES」において、移動、物流、物販などを多目的に活用できるMaaS専用の次世代電気自動車を出展し、初期パートナーとして、「アマゾン(米国)」「ピザハット(米国)」「ウーバー(米国)」「滴滴出行(中国)」「マツダ(日本)」と提携することを発表しました。また、社長が、「モビリティ・サービスのプラットフォームを担う会社になりたい」と新たな領域での成長に決意を示し、業界を越えて大きな話題となりました。

日本では、「ウーバー」に代表され、今や世界を席卷する配車サービスですら普及していないことから、MaaSと言われても、サービス普及や市場拡大のイメージが沸きにくいかもしれません。しかしながら、2020年代前半の完全自動運転の実用化に向けて、従来は自動車とは無関係であったIT企業なども巻き込んだ形で、世界の自動運転開発競争は加速しています。MaaS市場が拡大すれば、株式市場においても、追加的に評価される企業が増えるとみられることから、魅力的な投資機会を捉えるという意味でも、MaaSの動向には、注視が必要と考えられます。

店舗



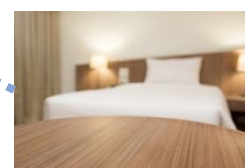
レストラン

自動運転プラットフォームのイメージ 自動運転車を店舗やテナントとして活用する例



※写真およびイラストはイメージです。

病院



ホテル

※上記銘柄について、売買を推奨するものでも、将来の価格の上昇または下落を示唆するものでもありません。また、当社ファンドにおける保有・非保有および将来の組入れまたは売却を示唆・保証するものでもありません。

日興アセットマネジメント

■当資料は、日興アセットマネジメントが市況等についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割り込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。